

右京区基本計画策定委員会
第4回 豊かな自然と歴史文化のまちづくり部会（摘録）

日 時： 平成21年12月3日（木）
午後6時30分～午後8時30分
場 所： 右京区役所5階会議室1
出席者： 神吉部会長・岩澤委員
奥田委員・久保委員
坂口委員

次期基本計画に盛り込む具体的取組について

1. 地域の資源としての右京の歴史や文化を活かす

- 観光資源のリストアップは既にされているのではないか。
- 京都は既に多くの観光資源が掘り起こされているという贅沢な悩みがある。
- これまでの取り組みで成果があったところは上手く生かし、成果があがらなかったところは分析して今後生かせばいい。
- 全く違う切り口のものゼロから取り組むことになる。
- 地域ごとに発掘されていても、発掘された情報を右京全体で勉強できる機会がない。
- 情報のある場所がバラバラだ。
- 長崎では地域の方達が観光ガイドをしていて、地元住民しか知らないような小さなスポットを案内しており、ガイドの方達が自ら勉強会を開き情報交換をしているという話を聞いた。
- 京北では、大型バスで京都駅まで観光客を迎えに行くボランティアガイドを年に数回実施している。
- 観光客が歩いて地域を観光できるようにするにはエリア分けが必要だ。
- 観光バスで、有名な観光スポットを巡る観光では本当の良さが発見出来ない。
- コースやスポットを提案したほうが観光もしやすいし、リピーターの増加にも繋がる。
- 地域住民がガイドとなり、生活圏の話をされると面白い。
- ガイドブックにあるような一般的な説明はもういらぬ。
- 非公開の文化財を公開する時に学生のガイドをお願いしたが、地元住民でも知らないことをガイドしてくれて凄く勉強になった。
- オフシーズンをなくし、年間を通してできるだけフラットに観光客に来て貰う工夫がいる。
- オフシーズンにいかに面白いことを掘り起こすかに懸ってくる。
- モデル的に具体案としていくつかやってみるといい。

2. 右京独自の、地域の個性に応じた景観づくり

- 景観についての記述が伝わりにくいと思う。今までの議論では、建物に限らず京北の山並みなども含めての景観という使い方だったが、京都市の景観行政は建物中心だったので、景観イコール建物と思われる。
- 「右京区独自の景観」についても、もっとわかりやすくしたほうがいい。
- やはり生活が基盤にあって築かれてくる景観だ。

- 町なかと山間部では地域特性が大きく異なる。
- 景観施策上も京北は無指定だ。地域特性の違いをどうまとめておくか。
- 現在、京北は京都市の景観施策の範囲に入っていないが、今後10年で入る可能性はある。それを見越すと地元側で施策提案していったほうがいい。
- 京都市の景観施策も、例えば、学区ごとなどで景観方針を決めたらそれを優先していいという条項もあるので、京北に限らず地区ごとに検討していったらいい。『魅力ある都市環境のまちづくり部会』でも、多くの住宅が建て替えの時期を迎えている地域で、建て替えのピークを迎える前に、景観を守るルールを地域で検討したほうがいいという話が出た。
- 嵯峨野エリアの鳥居本（伝統的建造物群保存地区指定）は行政指導が厳しい。
- 生活する側が景観保全していくのは非常に難しい。景観を守る方の負担は大きい。
- 建物だけでなく風景も含めての景観だとしたら、それらを残さないといけないのではないか。一方で廃れていくことを含めて文化であり、無理に留めるのは逆によくないのではないかという思いもある。

3. 右京ならではの歩く観光の推進

- 滞在型観光は街中で宿泊して右京の観光地へ毎日通うスタイルが多い。
- 大型バスで集客して大量に観光客をさばくようなタイプにはなりにくい。
- 小さいスケールで動かしていくことになる気がする。
- 具体的にモデル的に検討するとそういう意味で場所を含めて資源を考えていく。
- 最初から拠点等を準備してしまうと失敗するような気がする。
- モデル的に山間部系と都心部系と2～3箇所で内容まで踏み込んで具体的に検討をするということをやってみるといい。
- 冬の北山杉の景観，嵐山の早朝の景色も素晴らしい。
- 余裕を持って味わう観光を売り込んでいく。

4. 資源活用と産業振興，新しい暮らし方の提案へ

- 林業とか農業の話は京都市全体施策で検討される話だが、右京区としてローカルなところで何をするのかということになる。
- 区レベルで扱えない項目は簡素化してもいいのでないか。
- 京北地域には生産者が多いので意見がでてくるかもしれないが、都市部からだ地域でどう取り組むかという意見が出てこない可能性がある。
- 外の力を入れつつかもしれないが生産現場の人が住民にいるというのが右京の特色である。
- 地産地消を小学校の給食に取り入れるのは難しいのか。
- 京北は地産地消を給食に取り入れている。
- 水尾のゆずを地域の活性化に結びつけられないものか。
- 地産地消は農業には良いが林業には効果的でない。
- 朝市も大根が100円では儲けには繋がっていない。加工して付加価値をつけないと。
- 朝市の野菜の値段もスーパーの安い値段に合わせる形になっている。
- PR値段だとしても朝市で買った人がおいしいからといって現地まで足を運ぶかは疑問だ。
- 林業でも製品化するなど付加価値をつける動きはないのか。
- 林業は衰退の一途を辿っている。山は手入れされず荒廃していく。

- 区の基本計画で林業に切り込むのは難しい。
- 例えば、「京北の森を見守るツアー」を行うというような動きが出てくる可能性はある。
- ローカルで出来ることは何かを探ることや、生産現場でこういう協力をしようというような呼びかけは考えられる。
- 手づくり品をつくる若い作家などを応援するような取組はローカルかもしれない。
- メイドイン右京のブランドをつくったらどうか。
- 10年後を目指して、暮らしに右京らしいものが溢れていることが目的なのか。それとも、産業が残っていることが目的なのか。
- 文化というのは色々含んでいるので、どこまでこの部会で踏み込んだらいいのか難しい。
- 若い人が右京に住み続けようと思った時に、仕事があるかどうかは大事だ。
- 最近、複数の仕事（収入）を持つ生活スタイルをとる人を見聞きする。そういう人はまだ少数かもしれないが、そういうのもあっていいと思う。

4 重点的な取組について

- 「こだわりエリアを熱心に訪ねるツアー」をモデル的にいくつかつくってはどうか。観光だけでなく地域資源発見や学びなど、いろんなところに関連している。
- 林業家の疲弊、林地の荒廃状況が知られていない。